

3 まちの歴史

(1) 江戸時代

- ・南に寺町を形成する増上寺周辺、北に大名屋敷が集まる霞ヶ関周辺と隣接する立地にあり、その中心は大名屋敷や旗本屋敷、与力や同心などに与えられた組屋敷でした。
- ・一部の通り沿いや寺社の門前に町屋が建ち並ぶとともに、寺社も点在するなど、現在と同様、土地の利用形態は多様でした。
- ・江戸時代は明暦の大火、安政の大地震といった災害が多く起きた時代でした。

《歴史のトピックス：本地区の当時の様子》

■名所江戸百景 紀乃国赤坂溜池遠景



出典：「港区立郷土歴史館所蔵」

■江戸名所 虎門金毘羅



出典：「港区立郷土歴史館所蔵」

■江戸名所道戯尽 三十四 虎の御門外の景



出典：「港区立郷土歴史館所蔵」

《歴史のトピックス：明暦の大火》

- ・明暦3（1657）年1月18～20日に起きた大火によって市街の60%以上が焼野原となり、10万人以上の焼死者を出しました。江戸城の天守閣も焼け落ち、大名屋敷、寺社の焼失も数えきれない状態でした。
- ・大火を免れた南部の高輪・麻布ではその後は大名の郊外邸としての下屋敷の建設がいつそう進んでいました。

《明暦の大火後の幕府による復興計画》

- ① 曲輪内にあった大名屋敷を全部曲輪外に移転させたのをはじめとする大名・旗本屋敷の移転及び下屋敷の下賜。
- ② 八丁堀、矢の倉、馬喰町、神田辺にあった寺院の深川、浅草、駒込、目黒など周辺地への移転。
- ③ ①及び②に伴う町屋の霊岸島、築地、本所などへの移転。
- ④ 焼土を利用した木挽町、赤坂、牛込の沼地の埋立て。
- ⑤ 神田白銀町、万町、四日市町への防火堤の設定。
- ⑥ 日本橋・京橋間の三力所をはじめとする火除明地としての広小路の設定。
- ⑦ 主要街路の拡幅（六間 → 十間）。
- ⑧ 両国橋の架設。芝・浅草両新堀の開鑿。神田川の拡張。

■明暦の大火焼失地図



出典：「港区史 近世（上巻）」

《歴史のトピックス：安政の大地震》

- ・安政2(1855)年10月2日午後10時頃、推定マグニチュード7.0～7.1規模の大地震が発生しました。
- ・死者は7,000～10,000人前後と推測されています。
- ・青山、麻布地区の台地の震度は5、芝地区は震度6弱と推測されています。
- ・地震の被害は本所・深川や下谷が特に大きかったですが、港区域においても死者105人のうち83人が芝地区であるように、低地である芝地区で大きな被害が確認されました。

■安政の大江戸地震港区域の被害

地区	番組	①死者数1 (男/女)	②潰家 数	③潰土 蔵数	④死者数2 (男/女)	⑤負傷者数 (男/女)	⑥町名	⑦死者 数
赤坂	5	27(10/17)	66	8	29(12/17)	29(16/13)	赤坂表伝馬町一丁目	1
	15	62(25/37)	337	39	63(26/37)	96(53/43)	赤坂裏伝馬町一丁目	3
芝	8	79(42/37)	494	63	81(35/46)	41(20/21)	赤坂田町四丁目	4
							元赤坂町	4
							榎田伏見町	7
							西久保大養寺門前	1
							榎田久保町	1
							兼房町	12
							三島町	4
							芝南新門前一丁目代地	1
							露月町	4
							宇田川町	12
麻布	9	18(5/13)	115	14	18(6/12)	8(5/3)	芝新築座町	2
							神明町	4
							芝新網町	10
							柴井町	21
							芝西心寺町	2
							本芝二丁目	1
							本芝	1
							飯倉町五丁目	2
							麻布坂下町	1
							麻布三軒家町	4
麻布・高輪	10	11(5/6)	29	0	10(6/4)	21(9/12)	高輪北町	1
高輪	19	0	5	0	0	—	高輪台町	2
							—	0
							合計	105

出典：「デジタル版 港区史」

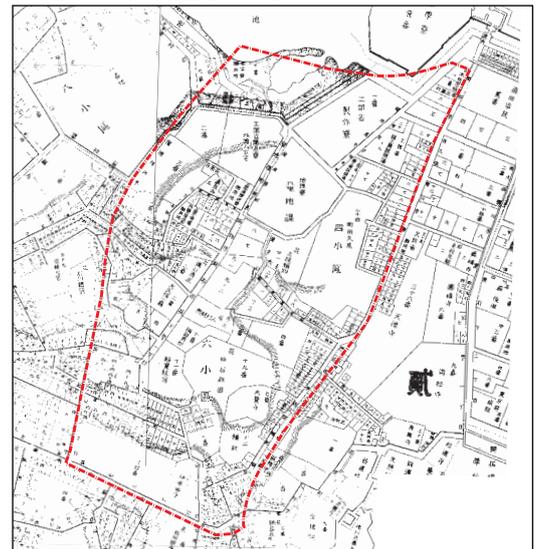
(2) 明治時代

- ・明治元(1868)年、新政府によって武家屋敷の一部は、政府に収公され、大名屋敷は公共施設用地や大きな住宅地へ、谷地の組屋敷や町屋は小規模な住宅や商店へと変貌していきました。

〈主な出来事〉

- ・明治11(1878)年 芝・麻布・赤坂の三区が誕生
- ・明治23(1890)年 アメリカ公使館が現在地へ移転(現アメリカ大使館)
- ・明治36(1903)年 路面電車が開通する

■明治時代の地図(明治9(1876)年)



出典：「増補港区近代沿革図集」

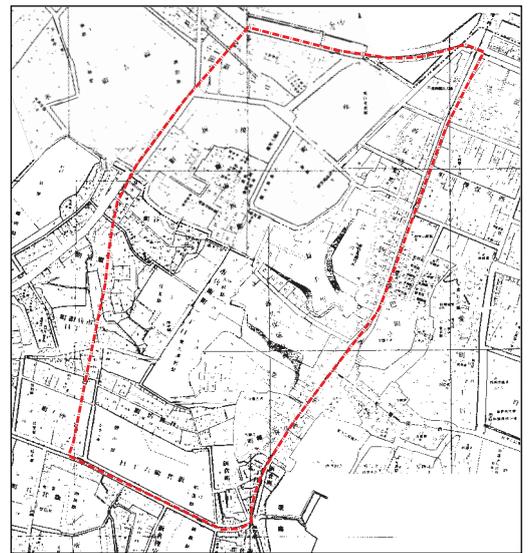
(3) 大正時代～昭和（戦前）

- ・現在の地区の外周道路の一部の六本木通りが都電の走る電車通りとして整備されました。
- ・六本木通り沿道には小規模な事務所や工場、商店が多く立地するようになりましたが、地区内のその他の場所では瀟洒なつくりの家も多く見られ、都心の静かな住宅地としての顔も有する町となりました。
- ・大正12(1923)年に関東大震災が発生し、区の北部が焼失しました。

〈主な出来事〉

- ・大正12(1923)年 関東大震災発生
- ・昭和11(1936)年 二・二六事件発生
- ・昭和13(1938)年 東京メトロ銀座線赤坂見附駅～虎ノ門駅間開業

■大正時代の地図（大正10～13(1921～1924)年）



出典：「増補港区近代沿革図集」

《歴史のトピックス：関東大震災による被害》

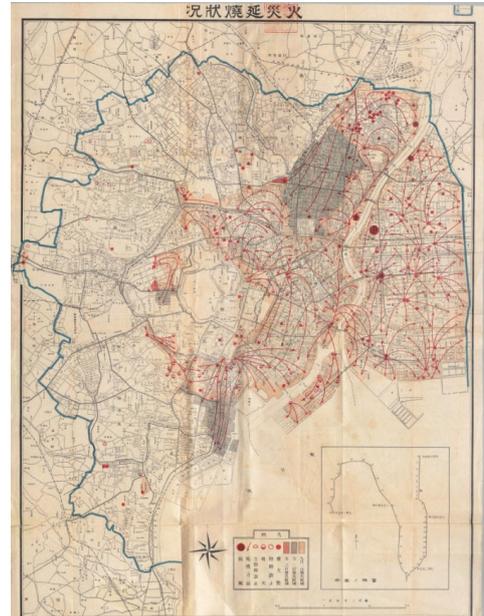
- ・大正12(1923)年9月1日11時58分頃発生した巨大地震であり、南関東から東海地域に及ぶ地域に広範な被害が発生し、最大深度は7、マグニチュード7.9と推定されています。
- ・死者105,385人、全潰全焼流出家屋293,387棟に上り、電気、水道、道路、鉄道などのライフラインにも甚大な被害が発生しました。
- ・比較的軽い被害といわれた赤坂区内では、9,833人の罹災者を出し、大倉商業、溜池大倉集古館、赤坂三会堂、米国大使館、溜池の葵館などが焼失しました。

■麻布笹筒町の倒壊家屋



出典：「デジタル版 港区史」

■火災延焼状況

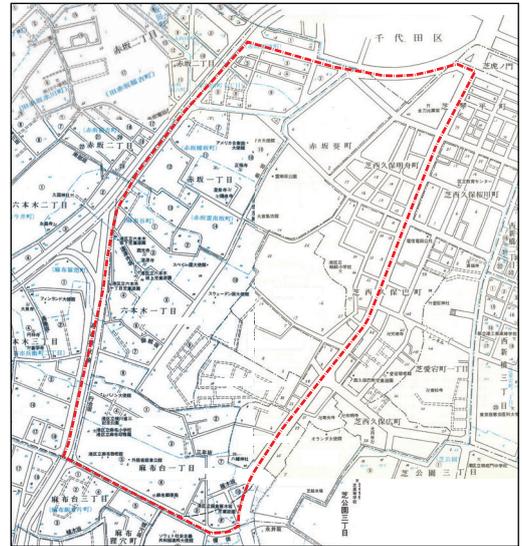


出典：「デジタル版 港区のあゆみ」

(4) 昭和（戦後）～現在

- ・昭和22（1947）年に、明治11（1878）年施行の郡区町村編制法にて制定された芝区、麻布区、赤坂区が合併し、現在の港区となりました。
- ・まちの大半が戦災を受けましたが、戦後は、中小の住宅地としての再建が進むとともに、大きな邸宅は分譲されました。
- ・戦前より立地するアメリカ大使館をはじめ、各国大使館の立地とともに国際的な雰囲気醸成されました。
- ・昭和30～40年代の高度経済成長では、高速道路や幹線道路の整備、高層のオフィスビルやマンションの建設、路面電車の廃止と地下鉄の新設が進み、昭和60年代からはじまる大規模な再開発により街並みは大きく変わっていきました。
- ・昭和40～50年代には町名が現在の虎ノ門、六本木、赤坂、麻布台に変更されました。
- ・平成に入ると昭和より続く地下鉄の新設が進み、大規模な再開発はさらに進められ、平成26（2014）年には環状第2号線の開通、令和2（2020）年には東京BRTという新たな交通手段が誕生しました。

■昭和時代の地図（昭和41～51（1966～1976）年）



出典：「増補港区近代沿革図集」

〈主な出来事〉

- ・昭和22（1947）年 3区統合により港区誕生
- ・昭和37（1962）年 首都高速道路開通
- ・昭和39（1964）年 東京メトロ日比谷線霞が関～恵比寿駅間開通（神谷町駅開業）
- ・平成9（1997）年 東京メトロ南北線四ツ谷駅～溜池山王駅間開業（溜池山王駅開業）
- ・平成12（2000）年 東京メトロ南北線溜池山王駅～目黒駅間開業（六本木一丁目駅開業）
- ・平成26（2014）年 環状第2号線（新橋～虎ノ門間）開通
- ・令和2（2020）年 東京メトロ日比谷線虎ノ門ヒルズ駅開業、東京BRT開業

《歴史のトピックス：各時代における土地利用と道路の形成状況》

- ・本地区では大名屋敷、官公庁施設、大使館と各時代で特徴ある土地利用がなされてきました。
- ・地区内及び周辺の道路は江戸時代ですでおおむね形成されており、形状に大きな変化はありませんでした。

○主な大名屋敷（江戸時代）

- ・地区内は大名屋敷や旗本屋敷、組屋敷が中心でした。以下が本地区内、周辺に屋敷を構えていた代表的な大名です。

《本地区内》

- 肥前佐賀藩鍋島邸（35.7万石）
- 出羽米沢藩上杉邸（18万石）
- 武蔵川越藩松平大和守邸（17万石）
- 美濃大垣藩戸田邸（10万石）など

《本地区周辺》

- 筑前福岡藩黒田邸（52万石）
- 信濃松代藩真田邸（10万石）など

■江戸切絵図（文久元（1861）年）



出典：「増補港区近代沿革図集」を基に作成

○主な官公庁（明治時代）

- ・江戸時代から大名屋敷、旗本屋敷といった大きな区画が残る本地区には、多くの官公庁関連の施設が建てられました。以下が主な官公庁施設です。

- 内務卿官宅（現アメリカ大使館付近）
- 地理局測量課（現The Okura Tokyo付近）
- 工部省本省（現虎の門病院付近）
- 司法省巴町区裁判所（現気象庁付近）など

■明治12（1879）年における各官庁



出典：「増補港区近代沿革図集」
「デジタル版 港区史」を基に作成

○主な大使館（昭和時代）

- ・港区には現在、日本に約140ある大使館の約半数があり、本地区内には以下の14か国の大使館があります。

- アメリカ合衆国大使館
- アルメニア大使館
- カザフスタン大使館
- サウジアラビア大使館
- ジョージア大使館
- スウェーデン大使館
- スペイン大使館
- トンガ大使館
- ナイジェリア大使館
- バーレーン大使館
- マルタ大使館
- ミクロネシア連邦大使館
- モルディブ大使館
- レバノン大使館

■大使館の立地状況



出典：「港区観光マップ」を基に作成

《歴史のトピックス：路面電車と地下鉄の歴史》

〈東京都全域〉

- ・明治15（1882）年に新橋～日本橋間に開通した馬車鉄道に始まり、明治36（1903）年に品川～新橋間で東京における初めての路面電車の営業が開始しました。街角と街角とをつなぐ路面電車は利用しやすく、親しみやすい庶民の乗り物でした。
- ・昭和2（1927）年に上野～浅草間にて地下鉄が開通されました。
- ・1960年代後半、道路整備が行われ、自動車が増え、自動車が街の主要輸送機関として台頭し、自動車交通の妨げ・混雑の原因となることから路面電車は廃止となり、代替交通機関として地下鉄が整備されました。

〈本地区区内〉

- ・大正時代には、外堀通り、桜田通り、外苑東通り、六本木通りに鉄道(路面電車)が開通しており、駅数が9駅と現在よりも多くありました。
- ・昭和時代に入り路面電車が廃止され、駅数は3駅(地下鉄)に減少しました。
- ・平成時代には六本木通りと麻布通りに新たに地下鉄(南北線)が新設され、近年では令和2（2020）年に日比谷線虎ノ門ヒルズ駅が開業し、現在は5駅3路線が鉄道網として整備されています。
- ・路面電車時代から現在も残る駅は虎ノ門駅と神谷町駅の二つです。

■路線図



出典：「都電が走った街 今昔」
「都電60年の生涯」を基に作成

〈地下鉄の開通と路面電車廃止の時系列〉

- ①明治 36(1903)年～ 路面電車の整備が始まる
 - 中目黒～築地(飯倉一丁目、神谷町、巴町、虎ノ門)
 - 品川駅前～飯田橋(飯倉一丁目、神谷町、巴町、虎ノ門、葵橋、溜池)
 - 四谷三丁目～浜松町一丁目(飯倉片町、狸穴町、飯倉一丁目、神谷町)
 - 渋谷駅前～新橋(福吉町、溜池、葵橋、虎ノ門)

※()は本地区区内の停留所

- ②昭和 13(1938)年 地下鉄銀座線開業(表参道～虎ノ門駅)
- ③昭和 39(1964)年 地下鉄日比谷線開業(北千住～中目黒駅)
 - ※昭和 42(1967)年～昭和 44(1969)年 路面電車の廃止
(中目黒～築地、品川駅前～飯田橋、四谷三丁目～浜松町一丁目、渋谷駅前～新橋)
- ④平成 9(1997)年 地下鉄南北線開業(四ツ谷～溜池山王駅)
- ⑤平成 12(2000)年 地下鉄南北線開業(目黒～溜池山王駅)
- ⑥令和 2(2020)年 地下鉄日比谷線虎ノ門ヒルズ駅開業

《歴史のトピックス：地名の歴史》

〈虎ノ門〉

- ・江戸城（現在の皇居）の周辺に数ある「門」の中の一つだった虎ノ門は、明治6（1873）年に撤去されましたが、その後は電車の停留所名として残り、昭和24（1949）年に芝虎ノ門として正式に町名となりました。町名の由来となった外郭門の名は、四神思想に基づいた江戸城の設計計画で、右白虎の方角に位置するため虎ノ門となったと考えられます。

〈六本木〉

- ・町名の由来は、往古、松の古木、大樹があったことから自然に称えられるようになったことや、付近にあった上杉・朽木・高木・青木・片桐・一柳の諸大名屋敷があり、これらの木にちなむという説があります。

〈赤坂〉

- ・赤坂の由来は、紀州徳川家の屋敷（現在の迎賓館）の地を、茜草が多く自生していることから赤根山と呼び、そこへ上る坂（後の紀伊国坂）を赤坂といった説があります。

〈溜池〉

- ・溜池は慶長11（1606）年大名浅野幸長が造成した人造湖で、承応3（1654）年の玉川上水整備以前における江戸城の外堀と江戸南部の水道インフラの役割を担っていました。明暦3（1657）年の明暦の大火以降は復興計画として、武家屋敷、寺社、町屋の移転のための市街地形成により焼土を利用して少しずつ埋め立てられ、明治8（1875）年～明治9（1876）年頃から水を落とされ干潟となり、町屋が形成されていきました。次第に陸地化が進み、1900年代後半以降に外堀が姿を消し、溜池は細流となり市街地化されました。

■江戸名所道戯尽 三十四
虎の御門外の景



出典：「港区立郷土歴史館所蔵」

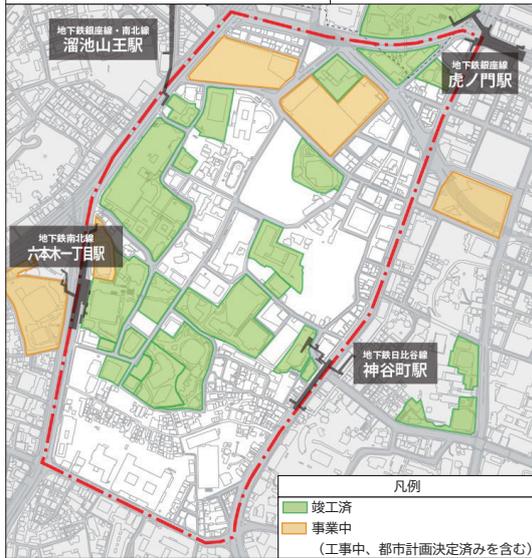
4 まちづくりの動向

(1) 開発状況

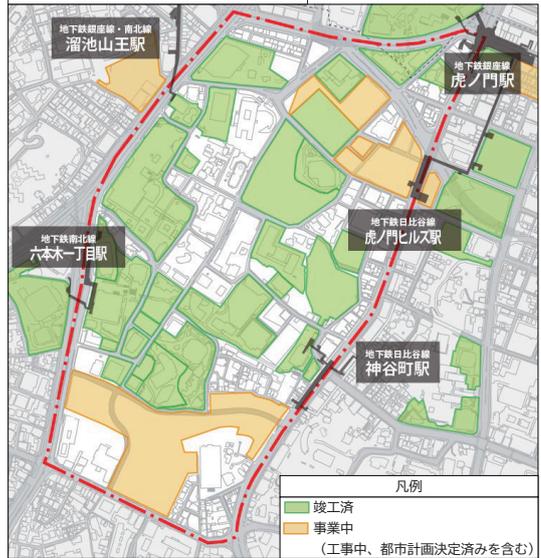
○開発状況

ガイドライン（平成24（2012）年12月）策定以降、約10年間で都市計画を活用した複数の大規模開発が進展し、国際的な宿泊施設、オフィス、都市型住宅などの拠点的な機能が集積しています。

策定時（平成24（2012）年12月）



現在（令和4（2022）年8月）

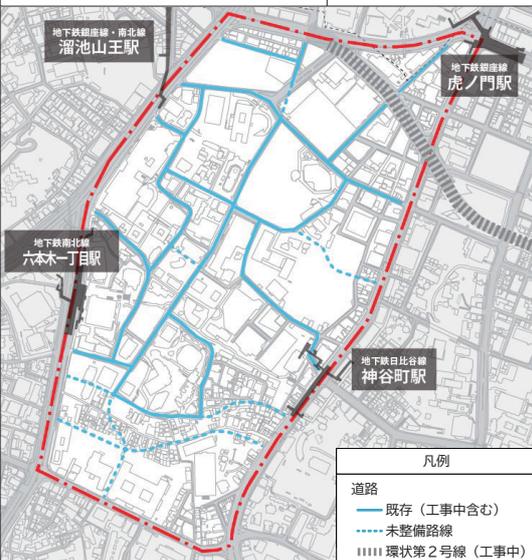


(2) 基盤状況

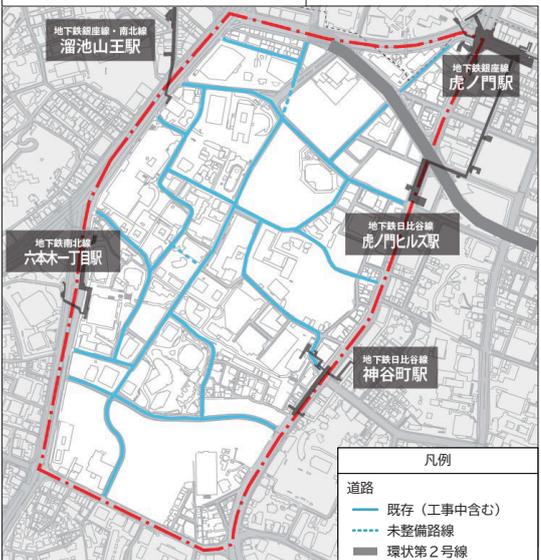
○道路

大規模開発による道路の整備が進み、既存の道路を含めるとガイドライン（平成24（2012）年12月）で示された自動車ネットワーク（連続的な道路網）が形成されつつあります。

策定時（平成24（2012）年12月）

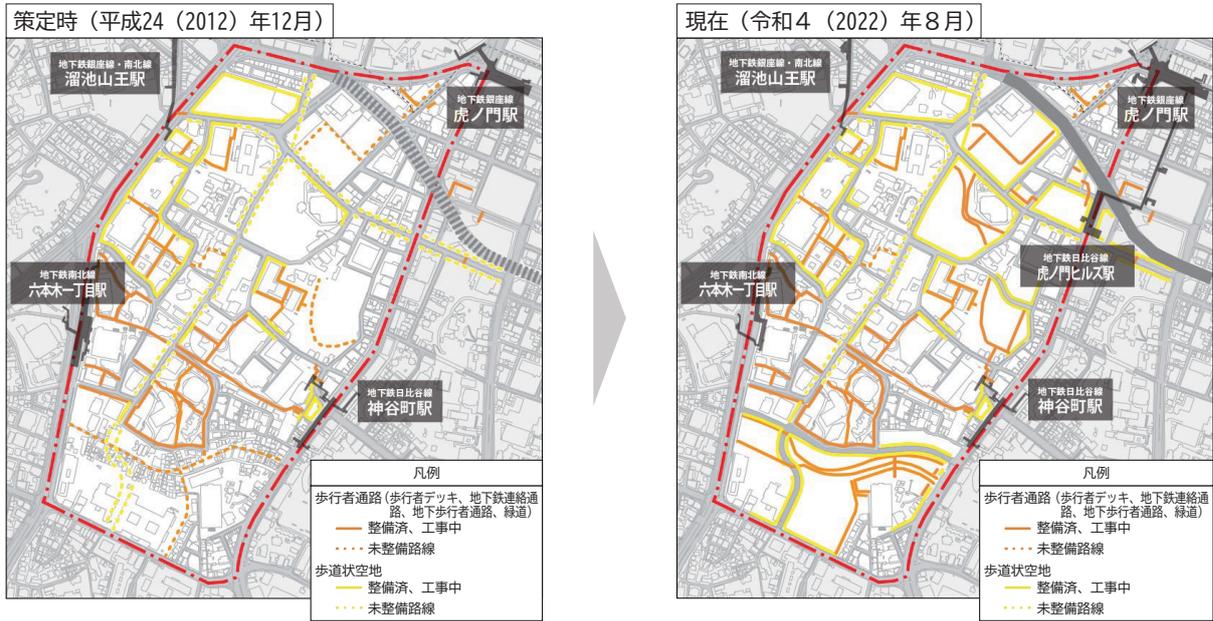


現在（令和4（2022）年8月）



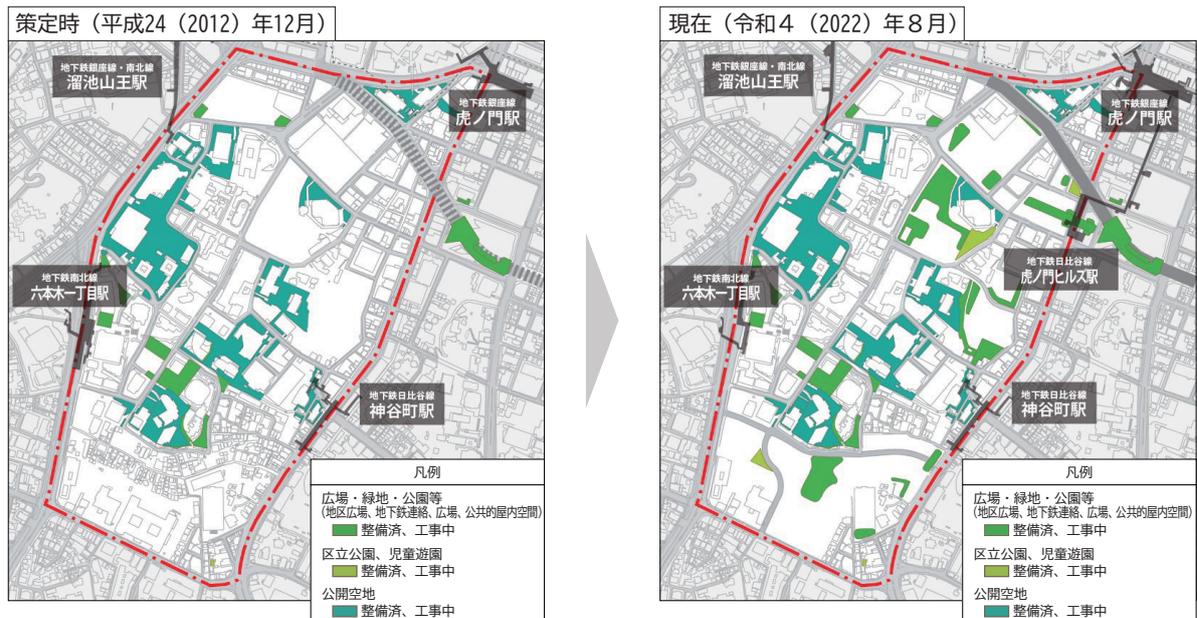
○歩行者通路

ガイドライン（平成24（2012）年12月）で示された歩行者通路はおおむね整備が完了しつつあります。

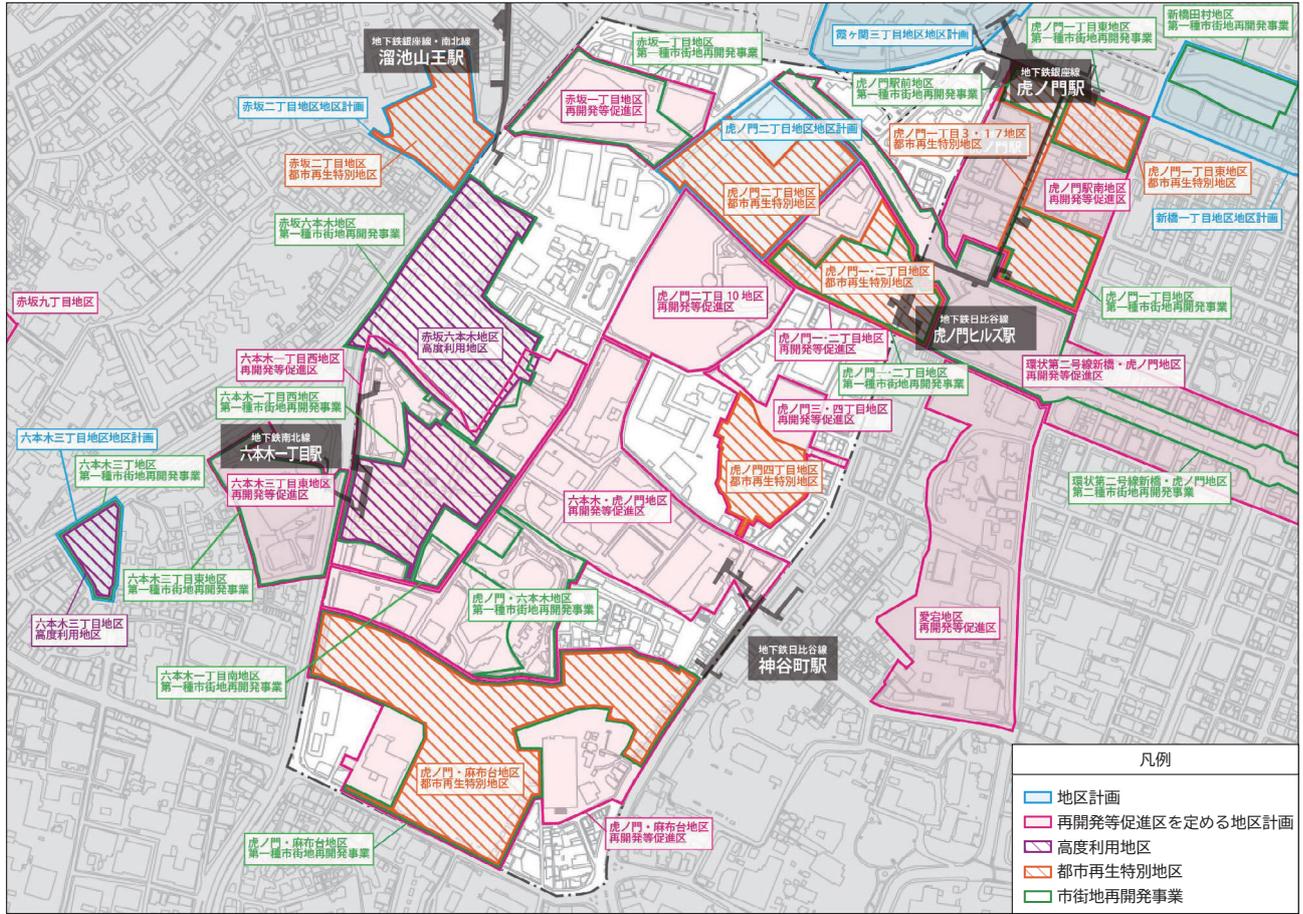


○広場・緑地・公園

大規模開発によるオープンスペースの整備が進み、ガイドライン（平成24（2012）年12月）策定時よりも、一般開放された広場、緑地がさらに多く整備されています。



(参考) 都市計画を活用したまちづくりが進められている箇所



(参考) 都市計画を活用したまちづくりにより整備された主な道路、歩行者通路、広場など(整備中・都市計画決定済みを含む)

